

### 3. 鳥類調査





ハクセキレイ (セキレイ科)



セグロセキレイ (セキレイ科)



キセキレイ (セキレイ科)



ツグミ (ヒタキ科)



ジョウビタキ (ヒタキ科)



オオルリ (ヒタキ科)



アオゲラ (キツツキ科)



スズメ (スズメ科)



カラヒワ (アトリ科)



ツバメ (ツバメ科)



ヒヨドリ (ヒヨドリ科)



ムクドリ (ムクドリ科)

## 1) 調査目的・背景

水田や魚野川、奥只見湖等の水辺や越後三山、守門岳等の山々など、変化に富んだ自然環境を有する魚沼市には、様々な野鳥が生息、飛来している。また、市内には越後三山鳥獣保護区や湯之谷奥只見湖鳥獣保護区をはじめ、8か所の鳥獣保護区が指定されている。2011年度に魚沼市自然環境保全事業で植物相調査を実施したところであるが、2012年度から新たな調査分野として魚沼市の鳥類調査を実施することとなった。本調査では鳥獣保護区に指定された地域の中から市民にとって身近な“里山”と呼ばれる場所を中心に選定し、鳥類調査を実施した。

本年度は、昨年度実施したこまみの湯周辺、杉の入沢、魚野川周辺を継続調査し、新に未観察である中子沢・三ツ又、大倉周辺を加えて調査を実施した。

また、調査という位置づけで探鳥会を兼ねた形で市民参加型の調査を実施することで、市民が鳥類や生息する自然環境への興味関心をさらに深めてもらう事についても目的とした。

## 2) 調査地域の位置

調査地は、夏鳥調査については、成田山鳥獣保護区（旧小出町青島見晴らしの湯こまみ周辺、以下こまみの湯周辺。）、御嶽山鳥獣保護区（旧堀之内町大石 杉ノ入沢）、の2か所に加え中子沢・三ツ又（旧広神村中子沢～三ツ又地区）、大倉周辺（旧守門村松坂馬頭観音～大倉、大倉沢大橋）の調査を実施した。冬鳥調査については、旧小出町の青島と大浦新田を中心とした魚野川周辺の調査を実施した。

### (1) こまみの湯周辺

旧小出町青島にある成田山付近にある駒見山を踏査した。東経138度57分、北緯37度13分に位置し、周辺には小出スキー場や見晴らしの湯こまみが隣接する。調査ルート付近には雑木林が多く、水田や養鯉池が点在している。

### (2) 杉ノ入沢

旧堀之内町大石に位置する御嶽山に程近い地域である。東経138度56分、北緯37度13分に位置し、杉林に囲まれた沢沿いの道を踏査した。

(3) 中子沢・三ツ又

旧広神村中子沢・三ツ又は、東経139度06分北緯37度23分付近に位置し、雑木林に囲まれた中子沢沿いの道を踏査した。

(4) 大倉

旧守門村大倉沢に存在する松坂馬頭観音は東経139度00分、北緯37度32分付近に位置し、松坂馬頭観音から麓の集落まで踏査した。また、破間川に架かる大倉沢大橋の上から破間川周辺の観察を行った。

(5) 魚野川周辺

旧小出町の大浦新田付近と新柳生橋の2か所を中心に定点観察を行った。大浦新田は東経138度11分、北緯37度11分付近に位置し、梅田養魚場周辺での観察を行った。新柳生橋は、東経138度57分、北緯37度13分付近に位置し、橋の上から魚野川周辺の観察を行った。

### 3) 調査方法

本調査の調査員及び探鳥会講師は『小出野鳥の会』から協力を得た。各探鳥会に2～3人を配置し、野鳥の同定や探鳥会での指導を行った。

本調査は他団体の主催、企画と合同での調査についても実施した。こまみの湯周辺では、小出野鳥の会と魚沼・小千谷地域理科教育センターが主催している探鳥会と合同で実施した。その他、探鳥会は開催日ごとに市報で参加者を募集した。

調査期間は夏鳥・留鳥の繁殖時期にあたる5月、また冬鳥・留鳥の越冬時期の計5回実施した。夏鳥調査は早朝6時から9時30分間の約3.5時間、冬鳥調査は9時から12時00分の約3時間行った。

調査方法は予め指定したルートを踏査し、目視と鳴き声で同定を行った。また調査は各調査地につき1回とした。

なお、本調査は、夜行性鳥類（フクロウ、ヨタカ等）、タカの渡りに関する調査は含まないものとする。

鳥類調査でのボランティア登録数は11人であり、探鳥会参加人数は延べ77人であった。各調査日時、調査員及び探鳥会参加人数は以下のとおりである。

(1) こまみの湯周辺

5月12日（日）6:00～9:00 調査員：桑原 和寿、柳瀬 昭彦

探鳥会参加人数：13人（小出野鳥の会主催『春の探鳥会』合同）

(2) 杉ノ入沢

5月19日（日）6:00～9:00 調査員：桑原 和寿、深澤 和基、柳瀬 昭彦  
探鳥会参加人数：19人

(3) 中子沢・三ツ又

5月18日（土）6:30～9:30 調査員：桑原 和寿、柳瀬 昭彦  
探鳥会参加人数：13人

(4) 大倉

5月26日（日）6:40～9:30 調査員：桑原 和寿、柳瀬 昭彦、佐藤 武  
探鳥会参加人数：19人

(5) 魚野川周辺

2月16日（日）9:00～12:00 調査員：桑原 和寿、角屋 禮士  
探鳥会参加人数：13人

## 4) 調査結果

(1) 鳥類確認種数

本調査での確認種数は、こまみの湯周辺22科35種、杉ノ入沢25科39種、中子沢・三ツ又18科22種、大倉22科31種、魚野川周辺15科26種で、合計30科60種であった。調査結果は、別表2013年度調査鳥類目録に示す。目録の科名、種名、学名及び並び順は『日本鳥類目録改訂第7版掲載鳥類リスト』（日本鳥学会 2012年）によった。

(2) 確認された絶滅危惧種

本年度調査で確認された絶滅危惧種は、新潟県絶滅危惧Ⅱ類、環境省絶滅危惧ⅠA類指定のチゴモズ（モズ科）*Lanius tigrinus*、新潟県準絶滅危惧種、環境省絶滅危惧Ⅱ類指定のサンショウクイ（サンショウクイ科）*Pericrocotus divaricatus*、新潟県、環境省とともに準絶滅危惧種指定のハチクマ（タカ科）*Pernis ptilorhynchus*、ノジコ（ホオジロ科）*Emberiza siphurata*、新潟県準絶滅危惧種指定のサンコウチョウ（カササギヒタキ科）*Terpsiphone atrocaudata*、コサメビタキ（ヒタキ科）*Muscicapa dauurica*の6科6種であった。

## 5) 2013年度鳥類調査の評価と今後の展望

小出野鳥の会 桑原和寿

魚沼市自然環境保全調査委員会委員

小出野鳥の会 柳瀬昭彦

里山の野鳥調査2年目(2013年)は、旧広神村中子沢・三ツ又地区、旧守門村鳥屋ヶ峰山麓の大倉集落と大倉沢ダム湖で、小出野鳥の会春の探鳥会の形で行った。そこでの結果は1年目の地域と大きく違う点はなかったが、溪流沿いやダム湖にオシドリとカワセミの他、カワガラスの姿が見られた(別表目録)。

また、本報告書の「はじめに」の中で、「里山は人の生活圏にあるため、人の行為が生物の生きる環境に大きく影響を与えている。人の営みによって、古来から見られた生物が消滅することも多い。一方で、人為的な作用が生き物の生存を可能にしている場合もある。ある時点において魚沼市内に生息する動植物を知り、その変化を明らかにすることは、人と他の生物との良好な関係を保つための必須の条件である。」という記述に基づいて、成田山鳥獣保護地区については1986年及び1987年の繁殖期5、6月の調査記録と本年度の調査結果との比較を試みた(表1)。

その結果、この20数年の間にいくつかの鳥種の変化が見られた。以下、その主な点について述べる。

まず、セキレイ科の3種のうち、ハクセキレイは、以前は下越の平野部では周年見られるものの魚沼地域では冬鳥であったが、近年は夏季に繁殖するだけでなく、初冬には国道17号の交差点で照明の電線に集団ねぐら(2~300羽)が見られるようになった。その一方、日本産の固有種セグロセキレイはその生息場所をハクセキレイに追われて生息数が減少する傾向が見られる。キセキレイは、もともと山地に近い溪流沿いに生息する種で平野部ではほとんど姿が見られないが、魚沼地域では数が多く、セグロセキレイ、ハクセキレイとは「住み分け」しているとみている。



図3-1 ハクセキレイ(左)、セグロセキレイ(中)、キセキレイ(右) (セキレイ科)

こうした比較の中で目立った変化が見られるのは魚野川の中州にあったコアジサシのコロニーが消滅した点である。1984年の北魚沼郡の鳥類リスト(初版・柳瀬)では、7月下旬



に魚野川に飛来するコアジサシの数が増加傾向にあり、数 10 羽の群れをつくって飛来しても営巣していないとあるが、1987 年の同リスト改訂版では青島大橋の下流の中州に 30 巣(+)のコロニーが見られるようになったとある。しかし、ヒナが孵化した後、ブルドーザーが中州の砂利を採取し、親が一斉に巣を離れている間に人間の姿をあまり恐れないカラスの群れがヒナを襲ったため、結局巣立ったヒナは 1 羽もなかった。そして、1995 年の同リスト 2 訂版ではコロニーは消滅したとある。

この変化の理由は、バブルの最盛期に錦鯉の養殖が盛んになり、選別された後、その年生まれのワカサギ大の稚魚が小川や魚野川に放流され、それを餌としたコアジサシが群れを作ったとみられる。つまり、コアジサシの繁殖は一時的で、また流動的だったと言える。小千谷市の信濃川の中州にできた 100 巣(+)のコロニーも消滅したようで現在は無い。

これと同様の生態を示したのが、旧小出町干溝地区のスギ林にあったアオサギとゴイサギのコロニーである。県下でも注目される大きさ(200 巣(+))になったものの消滅し、長岡市悠久山のコロニーが消滅した例と似通っていた(新潟県野鳥愛護会によると、このコロニーの消滅理由は判然としない。)

こうした例は、里山の人為的な環境変化が関係していると考えられるが、鳥類相の変動を見るうえで軽視できないと思われる。里山でのヨタカも観察例を減らしている種である。数が減っている種ばかりでなく、逆に増加している種としてカワウが挙げられる。魚野川に時に数 100 羽の群れが飛来することもあり、アユの食害は大きな問題となっている。その他、イカルチドリは増加の傾向にあり、コチドリはめっきり数が減っている。山地部では主にスギ林の手入れが行き届かないことが原因と思われるキビタキの観察例が年々多くなっている。もっともこの増加は越冬地や東南アジアとの関係も指摘されている。

魚沼市の里山、里地に生息する日本特産の固有種は先にあげたセグロセキレイの他、ノジコ、ヤマドリ、アオゲラの 4 種である。このうちヤマドリは猟友会会員の話によると、めっきり数が減っているというが、他 3 種は今のところ市内では安定した生息状態である。河川敷では、ヨシゴイの姿を見かけなくなってきた。また、湿地の干



図3-2 ゴイサギ (サギ科)



図3-3 イカルチドリ (チドリ科)



図3-4 コチドリ (チドリ科)

拓や水田の乾田化に伴ってヒクイナの姿もほとんど見られない。

新潟県レッドデータブック(2001年)の記載種のうち、絶滅危惧Ⅱ類のチゴモズ、準絶滅危惧種のサンショウクイ、サンコウチョウ、コサメビタキ、ノジコは少数ながら毎年安定した飛来が見られる。特に魚沼の山間地はノジコの生息数が多いことが注目される。一方、オオタカは近年増加傾向にあり、環境省はレッドデータブックからの除外を検討する模様である。魚沼でも観察例が多くなっている。



図3-5 サンショウクイ  
(サンショウクイ科)

上記に述べてきたような変化を生み出す原因として、一次産業(農業)の形態の変化、河川の営巣地の改変などが挙げられるが、今後里山、里地の豊かな環境の維持のあり方を巡って市民が知恵を出し合って行きたいものである。特に市内8カ所の鳥獣保護区は市民のみならず、県や国の貴重な財産としてその維持管理を市民が積極的に行うことが望ましい。

毎秋9、10月は小千谷市山本山高原の展望台で、県内外の野鳥愛護団体の「タカの渡り観察会」が行われる。春、東南アジアから北上し、北日本やサハリン、シベリアなどで繁殖した野鳥の中でタカ科の10数種が、秋、北から南下し、群れを作って南方へ飛去するのを観察する会である。



図3-6 ハチクマ (タカ科)

この度、魚沼市自然環境保全調査ではこの観察会の記録は除外したが、小出野鳥の会桑原和寿、佐藤武、角屋禮士らは毎年この観察会に参加している。山本山は長野県白樺峠、愛知県伊良湖岬、長崎県福江島などの渡りのコースと並んで全国的に有名である。

9月下旬、数日雨の日が続いた後、朝から晴れると上昇気流を利用して舞い上がったタカの群れの姿は壮観である。日によって違うが、小千谷市中山正則氏の集計によれば2013年9月18日は、8:30~16:30の間にハチクマ158羽、ツミ12羽、サシバ696羽など計867羽が上空を通過し、今年1番の飛去となった。



図3-7 サシバ (タカ科)

なぜこのカウントが大切かという点、年によって多少の変動はあるものの、サシバ、ハチクマなどの数の変化はその生息数が、これらレッドデータブックの絶滅危惧種の環境への変化の姿を証明していると思われるからである。今のところ、極端な数の変動は見られ

ないものの、魚沼市も広い鳥獣保護区を持っていてその維持管理上、注目しなければいけないからである。たとえば天然記念物のイヌワシが親のテリトリーを追われて山本山や魚沼の里山に、秋、姿を見せることがあるが、今年はその繁殖成功がゼロとの報告もあり、丁寧な観察を継続することが望まれる。少なくともこの 20 数年の間に成田山鳥獣保護区で見られたような変動が、山地部では起こらないことを目標に鳥獣保護区の様子をチェックすることが魚沼市民の義務と考え、観察を続けたい。

## 6) 参考文献

- ・魚沼市市民課環境対策室 編 2012年 『魚沼市植物相調査 中間報告書  
～自然を活かしたまちづくりのための市民参加型調査～』 魚沼市
- ・魚沼市環境課環境対策室 編 2013年 『平成24年度魚沼市自然環境保全調査報告書  
～自然を活かしたまちづくりのための市民参加型調査～』 魚沼市
- ・叶内拓哉 ほか 1998年 『山溪ハンディ図鑑 日本の野鳥』 山と溪谷社
- ・叶内拓哉 2006年 『野鳥と木の実ハンドブック』 文一総合出版
- ・叶内拓哉 2008年 『絵解きで野鳥が識別出来る本』 文一総合出版
- ・北魚沼地区理科教育センター 1987年 『野鳥の種類と数は季節によってどのように変化するか』  
北魚沼の自然と理科教育第14集 北魚沼地区理科教育センター
- ・桑原和寿、佐藤武、角屋禮士、柳瀬昭彦 『小出野鳥の会 会員フィールドノート』
- ・富永弘 編著 2007年 『原虫野湿原の自然 ―植物・野鳥・水生動物等の観察―』 魚沼自然調査グループ
- ・新潟県環境生活部環境企画課 編 2001年 『レッドデータブックにいがた』 新潟県環境生活部環境企画課
- ・日本鳥学会 2012年 『日本鳥類目録改訂第7版掲載鳥類リスト』 日本鳥学会
- ・柳瀬昭彦 1984年 『北魚沼郡の鳥類リスト（初版）』 小出野鳥の会
- ・柳瀬昭彦 1987年 『北魚沼郡の鳥類リスト（改訂版）』 小出野鳥の会
- ・柳瀬昭彦 1995年 『北魚沼郡の鳥類リスト（第2版）』 小出野鳥の会
- ・柳瀬昭彦 編 2013年 『小出野鳥の会だより（No272～No276）』 小出野鳥の会
- ・渡辺隆 ほか編 1999年 『見に行こう身近な自然 北魚沼自然観察ガイド』 北魚沼地区理科教育センター

(写真提供)

桑原和寿 角屋禮士 本田智明

# 2013 年度調査鳥類目録

合計確認種数		30科60種		調査地				
				◎	姿が確認できた種			
				○	声だけが確認できた種			
No	科名	種名	学名	調査地				
				こまみの湯 5月12日	中子沢 5月18日	杉ノ入沢 5月19日	大倉 5月26日	魚野川 2月16日
1	カモ科	オシドリ	<i>Aix galericulata</i>	◎	◎		◎	
2		ヒドリガモ	<i>Anas penelope</i>					◎
3		マガモ	<i>Anas platyrhynchos</i>					◎
4		カルガモ	<i>Anas zonorhyncha</i>	◎		◎	◎	◎
5		コガモ	<i>Anas crecca</i>					◎
6		ミコアイサ	<i>Mergellus albellus</i>					◎
7		カワアイサ	<i>Mergus merganser</i>					◎
8	カイツブリ科	カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis</i>					◎
9	ハト科	キジバト	<i>Streptopelia orientalis</i>	◎	◎	◎	◎	
10		アオバト	<i>Sphenurus sieboldii</i>			◎		
11		ドバト	<i>Columba livia</i>					◎
12	ウ科	カワウ	<i>Phalacrocorax carbo</i>	◎		◎	◎	◎
13	サギ科	アオサギ	<i>Ardea cinerea</i>		◎	◎		◎
14		ダイサギ	<i>Ardea alba</i>					◎
15	カッコウ科	ホトギス	<i>Cuculus poliocephalus</i>				○	
16		ツツドリ	<i>Cuculus saturatus</i>	○		○		
17	アマツバメ科	ハリオアマツバメ	<i>Hirundapus caudocutus</i>			◎		
18	タカ科	ハチクマ	<i>Pernis ptilorhynchus</i>			◎		
19		トビ	<i>Milvus migrans</i>	◎	◎		◎	◎
20		ノスリ	<i>Buteo buteo</i>		◎	◎		◎
21		サンバ	<i>Butastur indicus</i>	◎	◎	◎	◎	
22	カワセミ科	カワセミ	<i>Alcedo atthis</i>	◎		○	◎	
23	キツキ科	コゲラ	<i>Picoides kizuki</i>	◎		◎	◎	
24		アオゲラ	<i>Picus awokera</i>		○	○		
25	ハヤブサ科	チョウゲンボウ	<i>Falco tinnuculus</i>			◎		
26	サンショウクイ科	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>	◎	○	◎	◎	
27	カササギヒタキ科	サンコウチョウ	<i>Terpsiphone atrocaudata</i>			○		
28	モズ科	チゴモズ	<i>Lanius tigrinus</i>				◎	
29		モズ	<i>Lanius bucephalus</i>				◎	
30	カラス科	カケス	<i>Garrulus glandarius</i>	◎	◎	◎	◎	
31		ハシボソガラス	<i>Corvus corone</i>	◎		○	◎	◎
32		ハシブトガラス	<i>Corvus macrorhynchos</i>	◎	◎	◎	◎	◎
33	シジュウカラ科	ヤマガラ	<i>Parus varius</i>	◎		○	○	
34		シジュウカラ	<i>Parus major</i>	◎	○	○	○	
35	ヒバリ科	ヒバリ	<i>Alauda arvensis</i>	○		◎		
36	ツバメ科	ツバメ	<i>Hirundo rustica</i>		◎	◎	◎	
37	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	◎	◎	◎	◎	◎
38	ウグイス科	ウグイス	<i>Cettia diphone</i>	◎	○	○	◎	
39		ヤブサメ	<i>Cettia squameiceps</i>	○		○		
40	エナガ科	エナガ	<i>Aegithalos caudatus</i>	◎			○	
41	ムシクイ科	センダイムシクイ	<i>Phylloscopus coronatus</i>	◎		○		
42	メジロ科	メジロ	<i>Zosterops japonica</i>	◎	○	◎	○	◎
43	ムクドリ科	ムクドリ	<i>Sturnus cineraceus</i>	◎			◎	◎
44	カワガラス科	カワガラス	<i>Cinclus pallasii</i>		◎			◎
45	ヒタキ科	クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>	◎	○	○		
46		ツグミ	<i>Turdus naumanni</i>					◎
47		コルリ	<i>Luscinia cyane</i>	○				
48		ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureus</i>					◎
49		コサメビタキ	<i>Muscicapa dauurica</i>	◎		◎		
50		キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>	◎	○	◎	◎	
51		オオルリ	<i>Cyanoptila cyanomelana</i>	◎		◎	◎	
52	スズメ科	ニューナイスズメ	<i>passer rutilans</i>				◎	
53		スズメ	<i>Passer montanus</i>	◎	◎	◎	◎	◎
54	セキレイ科	キセキレイ	<i>Motacilla cinerea</i>	◎	◎	◎	◎	◎
55		ハクセキレイ	<i>Motacilla alba</i>	◎		◎	◎	◎
56		セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>					◎
57	アトリ科	カワラヒワ	<i>Carduelis sinica</i>	◎	◎	◎	◎	◎
58		イカル	<i>Eophona personata</i>	◎	◎	◎		
59	ホオジロ科	ホオジロ	<i>Emberiza ciodes</i>	◎	◎	◎	◎	
60		ノジロ	<i>Emberiza splurata</i>	○		◎		
◎姿が確認出来た種				30種	15種	28種	26種	26種
○声のみ確認出来た種				5種	7種	11種	5種	0種
合計				35種	22種	39種	31種	26種

表3-1 成田山鳥獣保護区における鳥類の種類と個体数の変化

No	科名	種名	調査年月日		1987年	1987年	2013年	1986年	1986年	2013年
			調査区間 (調査距離)	5月31日	6月14日	6月4日	6月1日	6月21日	6月6日	
			調査時間 (所要時間)	4:50~6:50 2h	6:00~8:30 2h30m	4:30~7:00 2h30m	4:30~6:00 1h	13:30~16:00 2h30m	4:30~6:30 2h	
			晴れ	くもり	晴れ	晴れ	くもり	晴れ		
1	キジ科	キジ	1	1						
2	カモ科	オシドリ	2						3	
3		マガモ							3	
4		カルガモ	2	2	1	4	4	11		
5	ハト科	キジバト	8	10	2	4	2	4		
6	ウ科	カワウ								
7	サギ科	ゴイサギ		1						
8		アオサギ				2	2	3		
9	クイナ科	ヒクイナ					1			
10	カッコウ科	ホトギス		1	1					
11		カッコウ				1				
12	ヨタカ科	ヨタカ	1							
13	チドリ科	イカルチドリ				4	4	6		
14		コチドリ				7	8			
15	シギ科	イソシギ				11	7	7		
16	カモメ科	コアジサシ				44	26			
17	タカ科	トビ	1	1	2	3	5	2		
18		サシバ			1					
19	カワセミ科	カワセミ				1	1			
20	キツツキ科	アオゲラ	2	1	2					
21	ハヤブサ科	チョウゲンボウ			1					
22	サンショウクイ科	サンショウクイ	1		2					
23	カササギヒタキ科	サンコウチョウ			2					
24	モズ科	チゴモズ		1	1					
25	カラス科	カケス		3	2					
26		ハシボソガラス	11	15	5	7	5	5		
27		ハシブトガラス	4	6	3	2		3		
28	シジュウカラ科	ヤマガラ	3	2	3					
29		シジュウカラ	6	6	3	2	2			
30	ヒバリ科	ヒバリ	3	4	1	5	8	4		
31	ツバメ科	ツバメ	19	26	3	21	19	10		
32		イワツバメ		1		2	5	7		
33	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	24	19	11	2	2	6		
34	ウグイス科	ウグイス	7	8	4					
35		ヤブサメ	2	4						
36	ムシクイ科	メボソムシクイ	1	2	1					
37	メジロ科	メジロ	2	3	3					
38	ヨシキリ科	オオヨシキリ				10	16	9		
39	ムクドリ科	ムクドリ	6	12	3	18	2	8		
40		コムクドリ				1	20	2		
41	ヒタキ科	クロツグミ	1	1	1					
42		キビタキ	2	4	8					
43		オオルリ			1					
44	スズメ科	スズメ	39	34	11	16	14	20		
45	セキレイ科	キセキレイ	5	5	2	10	10	14		
46		ハクセキレイ			1	1	1	7		
47		セグロセキレイ				6	9	6		
48	アトリ科	カワラヒワ	14	17	11	5	5	9		
49		イカル	2	2						
50	ホオジロ科	ホオジロ	27	36	5	1	1	1		
51		ノジコ	8	5	3					
合計種数			28	30	31	26	25	23		
合計個体数			204	233	100	190	179	150		